

神明社（庚申塔・木造薬師如来坐像）

坊村地区にある神明社の祭神は天照大神です。創立は不明ですが、神社の文献によると享保3（1718）年8月に円蔵院が大工牧野万右エ門久勝に小社を再建させたと記されています。

また、境内には明治32年2月15日（1899）に火伏せの神として遠州秋葉神社の分霊を授かり秋葉社が建立されました。現在、秋葉社には菅原道真公や応神天皇がともに祀られています。



庚申塔

神明社境内にある庚申塔は、享保8（1723年）年に造立され、施主は、坊村庚申講中と記されています。正面には青面金剛※が浮き彫りされており、4本の腕のうち上段の2本は輪宝と矛をもつのが通例ですが、この塔では碑の一部が欠いています。表情は忿怒の形相をして悪魔を追い払おうとしているようにも見えます。

お庚申※の行事は昭和初期頃まではどの地区でも盛大に行われていたので庚申塔は各所に造られています。

庚申の日には当番の家に集まり、ご馳走を食べながら夜通し世間話や農作業の話をしながら人としての生き方を身につける社会教育の場でありました。

※青面金剛 庚申信仰の本尊。体は青色で2

本、4本または6本の腕がある。

※お庚申 庚申の日に徹夜して眠らず、身を慎めば長生できるという信仰。



神明社境内にある庚申塔

木造薬師如来坐像

ふれあい館に隣接している小堂に安置されている薬師如来坐像は、『新編相模国風土記稿』には奈良時代のしんぺんさがみのくにふどきこう僧、行基作とありますが、これは伝承で、製作年代は室町時代とされます。

この像は一木造りですが、眼には玉眼がはめ込んであり、お顔は小像ながら生き生きとした穏やかさが感じられます。

膝の上の両手には薬壺が置かれ、薬師如来であることが分かります。柔らかな質感が巧みに表現された衣は、台座の下まで垂らされた法衣垂下の形式をとっています。これは中世の鎌倉地方を中心として流行しました。

この薬師如来坐像は坊村地区の人々によって大切に祀られています。

